識別番号	P 8
研究課題	イスラーム地域研究—新たな「知見」の獲得
研究代表者	私市正年（イスラーム研究センター長／外国語学部アジア文化副専攻教授／アジア文化研究所所員）
共同研究者	川島緑、赤堀雅幸（以上、外国語学部アジア文化副専攻教授／アジア文化研究所所員）、高橋圭（アジア文化研究所客員研究所員）
Summary	The research methods that have been followed and results that the Institute of Asian Cultures has heretofore obtained while in the process of carrying out Area Studies in regions such as the Middle East, Southeast Asia, and South Asia, will be transplanted to the field of Islamic studies, where they will be further expanded as the basic research framework. Recently there has been a tendency towards research focused on the political aspects of Islam. In view of this, our primary aim is to conduct research focusing on the social and cultural aspects that lie behind political movements, and which represent the greater diversity of Islam. Our second aim is to promote interregional and interdisciplinary cooperation and comparative research focusing on demotic aspects of Islam taking into account the historical contexts, and finally we seek to create a global network of researchers extending through Europe, the Middle-East, Africa and Southeast Asia, in order to facilitate investigation into the relationship between globalization and Islamic Area Studies. Under the above mentioned basic principles, our three research groups will engage in collaborative research activities such as the organization of domestic seminars and international symposiums, whereby we hope to establish an organic academic body.

1. 本研究の目的及び背景

基本的な研究の枠組みは、これまでアジア文化研究所が培ってきた中東、東南アジア、南アジアの地域研究の方法と成果を、イスラーム研究の場に転移、発展させることである。その手法・目的は、第一に近現代イスラームの政治的側面に関心が集まりがちであった近年の研究動向に対し、政治運動の背景にある、より多様なあり方をも示す社会的・文化的側面に注目した研究を行うことである。第二に民衆性に着目したイスラーム研究に力点を置き、歴史的視点をふまえつつ、地域間、多様な学問分野間の比較と協働を推進することである。第三に、中東・北アフリカから東南アジア、さらに欧米・アフリカまでを結ぶ研究者ネットワークを創出することによって、グローバル化とイスラーム研究の関係性を追究することである。

また研究に加え、教育面での活動、すなわちイスラーム研究に従事する若手研究者の養成も、本共同研究では最優先の課題として重視する。具体的には、若手研究者の本共同研究への参加を促し、また若手研究者自身による研究会の維持運営を支援するほか、TA・RA採用、ポスドク受け入れ、アジア文化研究所モノグラフ・シリーズやイスラーム研究センター・ワーキングペーパー・シリーズによる成果公開等を進める。

2. 研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

1 で述べた基本方針をもとに、本研究では研究代表者と共同研究者を代表とする三つの研究グループを組織し、国内研究会や国際シンポジウムなどの開催を通じて有機的な連携研究活動を行っている。各研究グループの研究テーマ・活動内容は以下のとおりである。

①研究グループ1「イスラーム主義と社会運動・民衆運動」(代表：私市正年)

イスラーム諸国における民主化(およびその反面における暴力)という重要な課題と結びつくイスラーム主義運動、社会運動、民衆運動の三つのファクターの関係性、さらにそれらの経済開発や社会開発との関連の分析を行う。民主化論や市民社会論のイスラーム世界への応用に関する従来の研究はもちろん、近年米国等で萌芽がみられる公共圏理論の応用なども吟味し、新しい理論構築を目指す。実際的な問題としても、イスラーム主義運動の終局の形態と、「原理主義」後の新しいイスラームの形を検討することはきわめて有用である。

社会学者、政治学者などの実証研究に、歴史学者による史料研究を加え、共同の現地調査等によって、地域間比較を行いつつ研究を進める。

年間4回の研究会を恒常的な研究活動の中核において、年度ごとに中心的な研究主題を決定し、共同現地調査を毎夏に実施する。研究蓄積に応じて、国際ワークショップ等を組織する。

②研究グループ2「東南アジア・イスラームの展開」(代表：川島緑)

従来、ほとんど研究がなされてこなかったアラビア文字表記のマレー語であるジャウイについて、先の「現代イスラーム世界の動態的研究」に始まる先駆的な研究を基礎として、ジャウイ文書資料の広範な調査収集を行い、それらを用いて、東南アジアにおけるイスラームの展開について研究を行う。

あくまでもジャウイ文書研究を基盤とした実証的な研究の蓄積を主たる目的とするが、早稲田大学を拠点とする研究グループ「アジア・ムスリムのネットワーク」とも連携しつつ、東南アジア地域内でのつながりや差異、南アジアや中東など域外との関係に注意を払い、各地のイスラーム運動やイスラーム民衆文化、イスラーム思想、エスノヒストリー等に関して研究を積み重ねる。当面、(1)キターブの収集・目録作成、(2)ジャウイ資料を含む現地語資料を用いた政治思想・運動の研究、(3)東南アジア・イスラーム研究の再検討とジャウイ文書研究の位置づけ、を3つの柱として、現地調査や文献収集を活発に実施し、シンポジウム、論集刊行などに取り組んでいく。

年間4回の研究会、研究合宿を研究活動の中核において、年度ごとにとくに重点を置く主題を決定して取り組み、随時に成果を公開していく。

③研究グループ3「スーフィズムと民衆イスラーム」(代表：赤堀雅幸)

スーフィズムや聖者信仰などは、研究の主題としては一般的でありながら、これまで十分に理論的で体系的な検討を加えられてこなかった。この点について、分担者たちがすでに加えてきた批判を発展させ、「スーフィズム・聖者信仰複合」とでも呼ぶべき現象に関する新しい共同研究の形を追求する。本研究グループは、この主題をスーフィズム、聖者信仰、タリカ、預言者一族崇敬の四つの大きな現象の複合として捉え、それらを広範囲に再考して理論的再検討を加えて、より総合的な理解を目指す。

思想研究者、歴史学者、人類学者の協働の下で研究会を積み重ね、国内外での部会形成による成果発表、学術誌での特集、さらに日英語による論集等の刊行を重ねていく。またこの

分野で日本と並んで先進的な共同研究を展開しているフランス CNRS 等との協力を深める。

年間 3 回の研究会、1 回の研究合宿を研究活動の中核において、年度ごとにとくに重点を置く主題を決定して取り組み、随時に成果を公開していく。

3. 研究の成果

本共同研究では以上の三つの研究グループが密接な連携をとりながら研究活動を行っているが、これまでの 4 年余の研究によって以下のような新たな「知見」を得ることができた。

第一は、1990 年代後半以降のイスラーム社会を「ポスト・イスラーム主義」の時代として理解する新しい分析枠組みを提示したことである。グローバルなテロリズムの背後で、イスラーム社会における政教分離や世俗化や個人主義を志向する動きを、「ポスト・イスラーム主義」として理解し、イスラーム社会の変化と対話・共存の可能性を明らかにしたことは、今後の研究に重要な指針を示したといえる。

第二は、東南アジア・イスラーム書（キターブ）を広範に収集・分析し、東南アジア・ムスリムの国境を越えたネットワークを実証した点である。現地諸言語アラビア文字表記（ジャウイ）イスラーム書や雑誌が、東南アジアの全ムスリムをつなぐ橋として機能し、民族や言語の違いを超えて東南アジア共通のイスラーム理解や共同体観念の形成を促進したことを明らかにし、東南アジア・イスラーム研究の新分野を開拓した。

第三は、「イスラーム」の多元性と複合領域性の実態を明らかにしたことである。民衆性に着目することで、それぞれの地域の文化や伝統を内包した多元的、複合領域的イスラームの実態を分析し、一神教や政教分離を前提としたイスラーム理解の限界（問題点）、不充分さを明らかにした。その上で多元性や実践性に立脚した新しいイスラーム理解の枠組みを提唱したことは重要な知的成果といえよう。